

イスラム教の宗派

菊地 達也 (kikuchi@l.u-tokyo.ac.jp)

I. イスラム教における宗派

73分派に関する預言者の予言：

預言者は次のように述べたという。¹「わが信仰共同体はやがて73の分派 (firqa) に分裂するであろう。その中で救われるのは一つであり、残りのものは滅びる」。すると、「救われるのは何者ですか」と尋ねられた。預言者は「慣行と共同体の民 (Ahl al-Sunna wa al-Jamā'a) である」と言った。すると「慣行と共同体とはなんですか」と尋ねられた。預言者は「私と私の教友たちが今日依拠しているものである」と言った。さらに彼は「わが信仰共同体の中の一つの宗派 (ṭā'ifa) は、復活の日まで真実を保ち続ける」と言い、「わが信仰共同体は誤りにおいて一致することはない」と言った。(Shahrastānī 1997, 9)

滅びの道にあり糾弾の対象となる宗派 (firqa) と受け入れられる学派 (マズハブ madhhab)、教団 (タリーカ ṭarīqa)

スンナ派以外の宗派は、イスラム教徒 (muslim) なのか不信仰者 (kāfir) なのか？

本講座での時代区分：

- ①7～10世紀頃：イスラム教自体の形成期、政治とクルアーン解釈をめぐって宗派が出現
 - ②10世紀頃～近代：主要宗派の制度化、宗派抗争の鎮静化、極端な宗派の周縁化
 - ③近現代：国民国家の形成に伴う分断、イスラム意識の高まりに伴う少数宗派の苦境
- ・三つの時代に分けてイスラム教における宗派のあり方を考える。

中東地域の宗派 (ユダヤ・キリスト教系を除く、×はすでに消滅したもの)

- (1) ハワーリジュ派系：アズラク派×、イバード派
- (2) シーア派系
 - a) 非イマーム派系初期宗派：カイサーン派×、ザイド派
 - b) イマーム派系宗派
 - b)-1 極端派系：ハッターブ派×、ヌサイル派 (アラウィー派)
 - b)-2 イスマーイール派系：イスマーイール派諸分派、ドウルーズ派
 - b)-3 十二イマーム派系： 十二イマーム派、シャイヒー派、バハーイー教
- (3) スンナ派系： スンナ派、アフマディーヤ
- (4) 混淆的、系統不明：ヤズィード教、アフレ・ハック、アリー・イラーヒー、アレヴィー、サービア教

¹ 多少のヴァリエーションはあるが、この伝承は、ティルミズィー、イブン・マージヤ、イブン・ハンバルらのハディース集に収録されている。

- ・特に三つ目の時代に注目し、不信仰者宣告の対象になりかねないシーア派系少数宗派の変容と生き残り戦略について比較。

II. 形成期 (7~10世紀頃)

クルアーンは7世紀中には形成されていたと思われるが、教義は未整備。預言者がもっていた宗教的権威の継承者も定まらず。一方では軍事的な成功と社会の変質。

(1)政治闘争と神学的問題

第一次内乱 (656~661) : 第4代正統カリフ、アリー (661年没) と預言者寡婦アーイシャ (678年没) やシリア総督でウマイヤ家に属するムアーウィヤ (680年没) が戦う。

657年にムアーウィヤとの徹底抗戦を主張しアリーの陣営から「離脱」した人々が最初の宗派、ハワーリジュ派 (al-Khawārij) となる。

ハワーリジュ派の主張:

①カリフ論: 平等主義、しかし罪を犯せば糾弾される。

②行為論と不信仰者宣告: 大罪を犯した者は信仰者ではなく不信仰者。不信仰者宣告。一方、ハワーリジュ派のように離脱しなかったアリー党 (shī'a Alī) は、アリーの息子フサイン (680年没) がウマイヤ朝の軍に殺害された680年のカルバラ事件を経て宗教宗派化。

ハワーリジュ派や多数派への対抗上、宗派特有の教義を形成:

①イマーム (imām) 論: 共同体の統治者はアリーの子孫のみ。預言者の宗教上の後継者でもある。

②救世主論: 700年以後、特定のイマームが幽隠 (ghayba) の後再臨し救世主 (mahdī) として自分たちを救う。

(2)クルアーン解釈

クルアーンには理解が難しい箇所、相互に矛盾するように思える箇所が多く、正統を体現する教会が存在しないこともあり、様々な解釈が登場。

例1: 神は物質で構成されているのか?

「その日 (審判の日) には、明るく輝く顔また顔、 (さも嬉しげに) 主を仰ぎ見る」 (Q75: 22-23) ²

「天と地を6日で創り、 (創造が終わると) それから高御座に座し給う」 (Q7: 54)

→ ムウタズィラ学派、伝承主義、アシュアリー学派

例2: すべては神によって予定されているのか、人間には自由な意思はあるのか?

「神は御心のままに或る者を迷いの道に陥れ、また御心のままに或る者を正しい道に手引きし給う」 (Q14: 4)

622	ヒジュラ(聖遷)、信仰共同体の成立
632	預言者没、アブー・バクルがカリフに即位、棄教者追討開始
656	反乱軍が第3代正統カリフ、ウスマーンを殺害、アリー即位、第一次内乱開始、ラクダの戦い
657	スィフイーンの戦い、ハワーリジュ派の出現
661	ハワーリジュ派がアリー暗殺、ウマイヤ朝成立
680	第二次内乱開始、カルバラ事件
684	悔悟者たちの反乱
685	ムフタールの乱
747	アッバース家の革命運動開始
833	アッバース朝カリフ、マアムーン、異端審問制度を設立 (~848)
909	チュニジアにイスマール派のファーティマ朝成立
946	十二イマーム派のブワイフ朝がバグダード入城

² クルアーンの章節については、たとえば13章27節の場合Q13: 27と表記する。クルアーンの訳語は井筒俊彦訳『コーラン』岩波文庫、1964年改訂版に準拠したが、訳語などは適宜修正した。

「悪いことをした者にはそれ相応の報いを与え、善いことした者には最善の御褒美を授け給う」
(Q53: 31)

→ ジャブル派、カダル派

例1の解釈は学問的な議論の枠内に留まることも多いが、例2の解釈のクルアーン解釈のように、当事者の政治的立場に直結することも多い。

ウマイヤ朝カリフ、アブドゥルマリク（在位685-705）やアッバース朝カリフ、マアムーン（在位813-833）のように宗教解釈に介入し、異端審問を実施するカリフも存在した。

(3)極端派の起源？

例3：他種への転生？

「凡そ神に呪われ、その御怒りを蒙り、猿や豚に変えられてターグート（Tāghūt、邪神）を崇拜するような者、こういう徒の立場こそいとも恐ろしいもの」（Q5: 60）

「猿になって、すごすごと引き退れ」（Q7: 166）

→ 神学論争の主要な論点にはならなかったが、アラウィー派（ヌサイル派）などは輪廻説の典拠の一つと見なす。

極端派（ghulāt）と呼ばれ過激な教義を持つシーア派系分派については、古代グノーシス主義などイスラム以前の宗教文化の影響が強調されがちだが、実証は困難。ただし、彼らの教義をクルアーン解釈の延長上で説明できることも多い。

III. 古典期・中世期（10世紀～近代）

(1)スナ派と主要シーア派の自己形成

9世紀中盤、アッバース朝の異端審問制度が終了し、多数派における宗教的解釈権はイスラム諸学を司るウラマー（‘ulamā’, 学者たち）のものになる。同時期までに活躍した4人の学祖を祖と仰ぐ四大法学派が成立。

10世紀におけるシーア派の政治的台頭に対抗する中、多数派の間でカリフ論などスナ派的な教義が整備。

11世紀に創設されたニザーミーヤ学院以降、学院制度が確立、正統四法学派、正統二大神学派による寡占状態が成立（他集団の淘汰、排斥）、正統学派（マズハブ madhhab）の教義を保守し継承するウラマー集団。

→ スナ派の形成

十二イマーム派、イスマーイール派といった主要シーア派分派も他派との論争を踏まえて古典的教義を確立し、自派内の極端な教義を排除。

指導者論における違いは大きく政治にも直結したが、神学や法学における差異は縮減。

1256年にニザール派系イスマーイール派イマームの政権が、1258年にアッバース朝がそれぞれ滅亡し、指導者論をめぐる差異が政治闘争に直結しにくい状況が成立。

→ スナ派と十二イマーム派の間での学問的交流

(2)スナ派における自他認識、他宗派に関わる規定

預言者が示した正しい慣行、スナ（sunna）を継承する人々という自己認識と、スナから逸脱（ビドア bid‘a）した人々という他者認識。

不信仰者宣告（タクフィール takfir）：イスラム共同体を構成しない不信仰者（カーフィル kāfir）と認定すること。ハワーリジュ派以来問題に。

棄教（リッダ ridda）：自らイスラム教を捨てること。法学において議論。

逸脱（ビドア bid‘a）：預言者のスンナから外れたり新奇なものを追加すること。必ずしも不信仰者宣告／棄教に直結するわけではない。スンナ派は正しい先達（サラフ salaf）を介して預言者スンナを継承しているが、他の宗派は逸脱により滅びる72分派と認識。

一方、どの集団が不信仰者宣告の対象となるのか、あるいはイスラム共同体の枠内に収まるのか、という問題については学者によって見解は多様。

啓典の民は二級市民であっても一定の法的保護を期待できるが、棄教は死罪相当であり他派の法的地位は極めて不安定。

十二イマーム派ですら見解が分かれ、イスマーイル派、ドゥルーズ派、アラウィー派には神学的には滅びるべき72分派の一つと見なされる、法学的には棄教罪が適用されるリスク。

「コーランか剣か」？

ハンバル学派法学者イブン・タイミーヤ（1328年没）はドゥルーズ派やアラウィー派を不信仰者、棄教者と認定。

通常、棄教罪については悔悟の機会が与えられるが、その機会を与えず即時処刑を主張。

これらドゥルーズ派、ヌサイル派（アラウィー派）は、イスラム教徒たちの合意に基づき不信仰者（kuffār）であり、彼らが屠殺したものを食すること、彼らの中の女性と結婚することは許されていないが、人頭税については合意がない。というのも、彼らはイスラム教徒でもユダヤ教徒でもキリスト教徒でもなく、イスラム教の信仰を離れた棄教者（murtaddūna）であり、五度の礼拝、ラマダーン月中の断食、巡礼の必要性を認めず、神とその使徒が禁じた死肉、ぶどう酒、その他を禁じていないが、これらの信条と共に二つの信仰告白を公には認めているからである。（Ibn Taymīya n.d, XXXV 161）

イスラム法学における「異端」的宗派の扱いは極めて過酷。しかし、彼の法判断が権力者によって実行に移されたわけではなく、アルビジョア十字軍（13世紀）のように大規模な「異端」殲滅戦が実行されることもなかった。

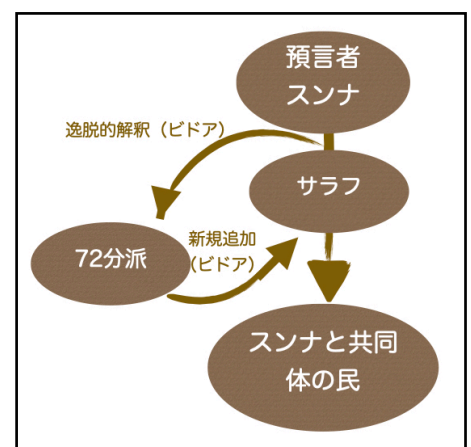
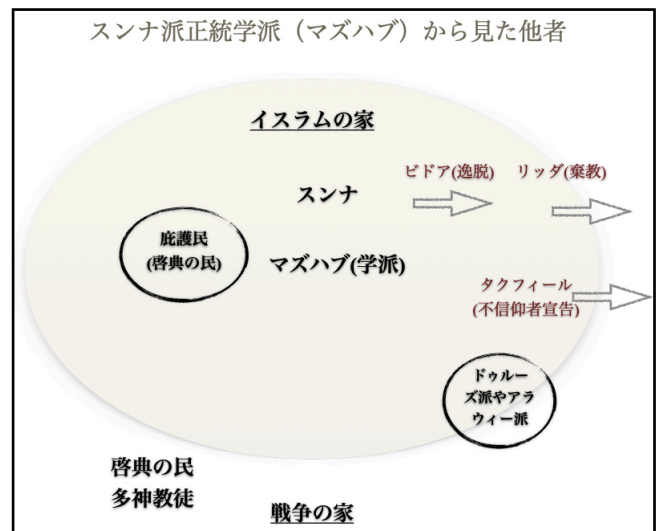
IV. 近現代

(1) 国民国家の形成とイスラム主義／サラフ主義の台頭

19～20世紀、北アフリカ、中東、南アジアに国民国家が形成されると、国民であることが少数宗派にも求められ、彼らの宗教共同体が国境で分断されることも。

20世紀後半以降、イスラム主義とサラフ主義が台頭すると、正しいイスラム教徒であることが求められることが増え、一部では少数宗派への攻撃も発生。

(2) ニザール派系イスマーイル派の場合



概略：11世紀にファーティマ朝系イスマーイール派から分派。アラムート要塞（イラン）を拠点にセルジューク朝、十字軍に対抗し、「暗殺教団」として知られる。1256年のアラムート要塞陥落以降、イマームとその配下はスーフィー教団の体裁をとるようになり、シリア、イラン、中央アジアの共同体が分断。

イランの共同体はインドでの布教に成功し、イマームもインドに移住（ホージャ派）。

スーフィズムの影響を色濃く受け、インド進出以降はヒンドゥー教の要素も入り込む。

イギリス統治下でイスラム性が求められると、イマーム、アーガー・ハーン3世（1877-1957）は派内の近代化を進める一方で、イスラム社会内の中道を歩むことを目指し、問題のある儀礼や教義を修正。門外不出の教義書を公開。

独立後のパキスタンでイスラム主義勢力による少数宗派への圧迫が強まると（1977年に不信仰者宣告のファトワー）、イマーム、アーガー・ハーン4世（1936-）は宗教歌謡の中からヒンドゥー的要素を排除。開発言説、人道主義、近代化によって自派を正当化。

宗派指導部はフランスとイギリスに置かれ、学術研究に協力しながら、開発や宗派教育によって世界各地の共同体を統合。

(3)ドゥルーズ派の場合

概略：11世紀にファーティマ朝系イスマーイール派から分派。ファーティマ朝のイマーム＝カリフ、ハーキム（在位996-1021）を神格化し、クルアーンに代わる独自聖典『英知の書簡集』を保持。輪廻転生を信じ、十二イマーム派、イスマーイール派同様、信仰偽装（タキーヤ taqiya）の教義も持つ。信徒の大多数は聖典を読むことを許されず。現在の共同体はレバノン、シリア、イスラエル、ヨルダンに存在。

1920年のシリア分割によって共同体が分断。

他のイスラム教徒国民からは非イスラム性に関する疑念、信仰偽装と秘密主義に対する反感。

1960年代には派内からの暴露行為もあり、1974年、レバノンの宗派指導部はマカーリムの著書を通じて教義を公開（しかし、聖典は非公開）。

1980年代以降、信徒による出版活動が活発化。

ドゥルーズ派は〔独立した〕宗教（dīn）ではなく学派（マズハブ）である。なぜなら、「何らかの『宗教』から枝分かれしたセクト（niḥla）は、宗教ではなく学派と呼ばれ、たとえばアラウィー派とドゥルーズ派は、〔独立した〕宗教ではなくイスラム教内の諸学派の中の二つである」（アッコーのムフティーの言葉より）からである。…〔中略〕…

〔著述家〕フアード・アフラム・ブスターニーはベイルートの雑誌『できごと』の記事において「ドゥルーズ派はあらゆる点においてイスラム教に帰属しない」と強調し、「ドゥルーズ派はイスラム教徒の宗派（tā'ifa）ではなく、単にイスラム教とは違う独自宗教である」とも主張した。しかしながら、アズハル・モスク——ハーキムが宗教的なモスクから学問・宗教を対象とする大学に改変した——の総長マフムード・シャルトゥートによる声明は、「ドゥルーズ派が唯一神教徒（muwahhidūn）・イスラム教徒・信仰者（mu'minūn）である」ことを強調しているのである。（Zahr al-Dīn 1994, 75）

→ スンナ派著名人の言葉を借りた正当化。³

³ シャルトゥート（1963年没）はアズハル総長をつとめた改革派ウラマーであるが、実際には上記のような発言をしてない（Hazran 2010, 234）。

学派のほかには教団（タリーカ）、哲学（falsafa）といった自己規定もあり。×宗派
1990年代以降、宗派指導部の認可を得ていない著作物が増加、自派を非イスラム教と規定する者も現れる。

(3)アラウィー派の場合

概略：9世紀以前に溯る極端派の伝統を受け継ぎ、10世紀に成立。三位一体の神観念を持ち、アリーを最上位の神格の顕現としムハンマド（632年没）、教友サルマーン（655/6年没）を下位の神格の現れと見なす。輪廻転生を信じ、キリスト教やペルシア的伝統とも混淆。信仰偽装の教義あり。主要な居住地はシリア。一般信徒が教義書を読むことはドゥルーズ派以上に難しいようである。前近代まではヌサイル派と呼ばれており、アラウィー派という自称は1920年代に始まる。

アサド家の出身宗派でありシリアのバアス党において力を持つ。

ドゥルーズ派同様、宗教教義書の秘匿や信仰偽装について批判を受ける。

1973年と1980年には宗派指導部が、聖典がクルアーンであること、独自の宗派ではなく十二イマーム派であることを宣言。宗教上の逸脱と見なされうる教義は外敵の策謀によるものであると主張するが、教義書の開示は拒絶。

十二イマーム派の側にも認める動き。

しかし、2006年には規範的な宗教テキスト群が暴露的に出版。⁴

→ 十二イマーム派とはまったく違う教義の出典が明るみに。

参考文献

- Abū Mūsā & Shaykh Mūsā (eds. & intro.) 2006-: *Silsila al-turāth al-‘Alawī: Rasā’il al-ḥikma al-‘Alawīya*, 12 vols., Diyār ‘Aql.
- Dana, Nissim 2003. *The Druze in the Middle East: Their Faith, Leadership, Identity and Status*, Brighton, Portland.
- Eisenstein, Herbert 1992: “Sunnite Account of the Subdivisions of the Shī‘a,” in Frederick De Jong (ed.), *Shī‘a Islam, Sects and Sufism: Historical Dimensions, Religious Practice and Methodological Considerations*, Utrecht, 1-9.
- Gaiser, Adam R. 2008: “Satan’s Seven Specious Arguments: al-Shahrastānī’s *Kitāb al-Milal wa al-niḥal* in an Ismaili Context,” *Journal of Islamic Studies* 19-2, 178-195.
- Hazran, Yusri 2010: “Heterodox Doctrines in Contemporary Islamic Thought: The Druze as a Case Study.” *Der Islam* 87, 224-247.
- Ibn Taymīya, Aḥmad n. d.. *Majmū‘ Fatāwā Shaykh al-Islām Aḥmad ibn Taymīya*, ed. by ‘Abd al-Raḥmān ibn Muḥammad ibn Qāsim & Muḥammad ibn ‘Abd al-Raḥmān ibn Muḥammad ibn Qāsim, s. l.: s. n., 37 vols.
- The Institute’s Department of Education, The Institute of Ismaili Studies 1997 *Ta‘lim*, 5 vols., London.
- Makarem, Sami Nasib 1974: *The Druze Faith*, New York.
- Olsson, Tord 1998: “The Gnosis of Mountaineers and Townspeople. The Religion of the Syrian Alawites, or the Nuṣairīs,” T. Olsson, Elisabeth Özfalga & Catharina Raudvere (eds.), *Alevi Identity: Cultural, Religious and Social Perspective*, London, 167-183.
- Shahrastānī, Abū al-Faṭḥ al- 1997: *Kitāb al-Milal wa al-niḥal*, ed. by Şidqī Jamīl ‘Atṭār, Beirut.

⁴ ドゥルーズ派にも類似の現象が起きており、1986年に聖典『英知の書簡集』がレバノンで暴露的に出版された。アラウィー派のケースとの間には編者名、出版地、出版社名（おそらくすべて架空のもの）に共通点が見られるが、関係性は不明。ただし、ドゥルーズ派の場合は19世紀以降多数の聖典写本が海外に持ち出され、欧米の図書館、研究機関で所蔵されているため、衝撃度は相対的に低かった。

- Zahr al-Dīn, Ṣāliḥ 1994. *Ta'rikh al-Muslimīn al-Muwaḥḥidīn (al-Durūz)*, Beirut: al-Markaz al-'Arabī li-al-Abḥāth wa al-Tawthīq.
- 宇野昌樹 1996: 『イスラーム・ドゥルーズ派：イスラーム少数派からみた中東社会』 第三書館.
- 大淵久志 (訳) 2020: 「イスラーム世界の諸宗教と分派：ファフルッディーン・ラーズイー 著『諸分派の信条』翻訳」 『イスラーム世界』 94号、29-57.
- 菊地達也 2005: 『イスマーイール派の神話と哲学：イスラーム少数派の思想史的研究』 岩波書店.
- 菊地達也 2002: 「シーア派思想研究とその問題点」 『思想』 941号、136-153.
- 菊地達也 2009: 『イスラーム教：「異端」と「正統」の思想史』 講談社.
- 菊地達也 2016: 「現代ドゥルーズ派の自己表象」 塩尻和子(編著) 『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』 明石書店、132-157.
- 菊地達也 (編著) 2017: 『図説 イスラーム教の歴史』 河出書房新社.
- 菊地達也 2021: 『ドゥルーズ派の誕生』 刀水書房.
- 菊地達也 2022: 「イスラーム思想における極端派的伝統：ヌサイル派 (アラウイー派) 源流思想における輪廻思想を事例として」 『東洋学術研究』 61巻1号、印刷中.
- 子島進 2002: 『イスラームと開発：カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容』 ナカニシヤ出版.
- 水上遼 2019: 『語り合うスンナ派とシーア派：十二イマーム崇敬から中世イスラーム史を再考する』 風響社.